

## 〈報告〉

海外の日本語教育とつながる  
オンラインセミナー

— Web会議システムを活用した実践事例の報告 —

澤 邊 裕 子

## 1. はじめに

2019年、国際交流基金より「2018年度海外日本語教育機関調査結果（速報値）」（調査期間2018年5月～2019年3月）が公表された。報告書では、海外での日本語教育は過去最多の142の国、地域で実施され、学習者は再び増加に転じ、3,846,773人となったことが報告されている。こうした状況において、海外の日本語教育現場で活躍できるマインドやスキルを持った人材を育成することは、重要な課題である。2019年度は、こうした状況を踏まえて夏と冬に海外の日本語教育とつながるオンラインセミナーを開催した。本稿ではそれぞれの取り組みと参加学生たちへのアンケート調査の結果を報告し、今後のオンラインセミナーの可能性を考えていきたい。

## 2. Web会議システムを活用したオンライン研修の概要

ICTの進歩により、近年、遠隔地にいる参加者同士がつながって行われる、同時・双方向型のオンライン教師研修が多くの現場で行われるようになってきている（後藤・松井2016, 澤邊・中川・岩井・相澤2018など）。活用しやすい仕様により、教育現場や教師研修でも多く活用されるようになってきたものに、zoomというWeb会議システムがある<sup>1</sup>。専用のアプリやインターネット環境や補助的な道具（マイク、カメラ）があれば、設定されたミーティングルームのURLをクリックするだけで、遠隔地にいる者同士が簡単につながり、直接対面しているのと同様のように話をしたり、画面共有の機能を用いながら同じ資料を見てディスカッションしたりすることができる。

<sup>1</sup> 2020年に入り、新型コロナウイルスの感染拡大の影響によって、テレワークやオンライン学習／教育が急速に広まり、一気に注目を集めて使用者が増えたシステムの一つである。

今回は、このような日々進化するオンラインのツールを用いて、海外の日本語教育とつながるオンラインセミナーを企画、実施した<sup>2</sup>。

### 3. 韓国の日本語教育現場を知るオンラインセミナー

#### 3.1 オンラインセミナーの概要



図表1 徳沼高校側のSkype交流場面

韓国は海外で最も日本語教育機関数が多い国である。2019年9月には3日間にわたり、韓国の日本語教育現場を知るオンラインセミナーを開催し、参加は2年生から大学院生までの任意とし、毎回10名前後の学生が参加した。

1日目(9月2日)は、韓国の徳沼高校の高校生とのオンライン交流会をSkypeのツールを用いて行った。2019年の9月時点で、韓国側の教育現場ではzoomの使用が許可されていなかったため、既に使用の許可が下りていたSkypeを用いることになったのである。そのため、教室と教室をつないでの遠隔的な交流となり、本学の参加学生も大学の教室に集まって行なった。この日の交流では、韓国の高校生からの質問に、やさしい日本語を用いて答えたり、大学生側から韓国の高校生に質問をしたりという活動を50分ほど行なった。

2日目(9月3日)は国際交流基金ソウル日本文化センターの上級日本語教育専門家である、山口敏幸先生による「韓国の日本語教育事情セミナー」である。山口先生は韓国の国際交流基金ソウルセンターから、学生は自宅からzoomのミーティングルームに集まった。はじめに約30分間にわたって、山口先生による韓国の日本語教育の学習者数、現況についてのパワーポイントを用いてのレクチャーがあり、後半に一人一つずつ質問をして、同時・双方向の質疑応答が実現した。

3日目(9月4日)は韓国の弘益大学の大学生とのオンライン交流会を行った。弘益大学校で日本語を学習している学生と本学の学生がzoomのブレイクアウトセッション機能を利用して小グループに分かれ、韓国や日本の

<sup>2</sup> 2019年度の韓国研修旅行の代替として企画、実施された。

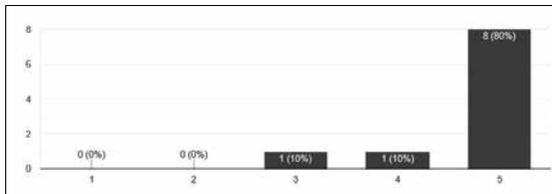
大学生活についてお互いに気になることについて質問し、一時間ほど意見交換を行った。

### 3.2 参加学生へのアンケート結果から

ここでは、3日間にわたって実施したオンラインセミナー参加者へのアンケート調査の結果を報告する。回答者は3日間のすべてのセミナーに参加した10名であった。

#### (1) 徳沼高校とのオンライン交流会に対する満足度

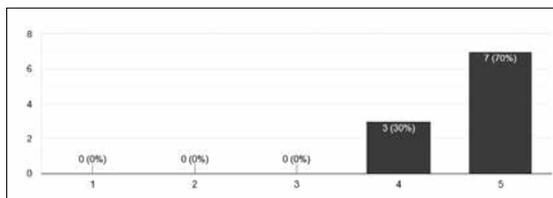
「5 非常に満足した」と答えた学生が8名（80%）、「4 満足した」が1名（10%）、「3 どちらとも言えない」が1名（10%）であり、概ね満足度の高い交流会になったことがわかった（図表2）。自由記述の感想欄には、「韓国の高校生がとても元気で、普段の授業の雰囲気を想像することができた。高校生のみなさんも楽しんでくれている様子で、相手の顔を見ながら質問することができたことが嬉しかった」「みんなとてもパワフルで、内容も馴染みやすいものだったのでとても楽しかった。思っていた以上に日本語が上手だった」など、高校生の元気の良さに刺激を受け、交流自体を楽しんだというコメントが多く見られた。一方、「高校生のみなさんにとっては、日本語を使って韓国について紹介したので日本語の勉強になったと思う。私としては、やさしい日本語を使う機会にはなったが、日本語を教えたわけではなく、普段の日本語の授業の様子を見たわけではないので、交流自体は楽しかったが日本語教育に関して何か新しいことを学んだという感じはしなかった」という評価もあり、交流会の目的についてただ楽しむのではなく、交流会を通して海外の日本語学習者や日本語教師から何を学ぶかについて、ヒントとなるような観点を事前に学生に提示することの必要性があることがわかった。



図表2 徳沼高校とのオンライン交流には満足しましたか(N=10)

## (2) 韓国の日本語教育事情セミナーに対する満足度

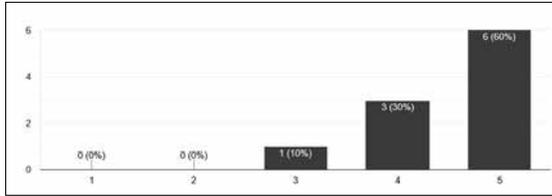
「5 非常に満足した」が7名（70%）、「4 満足した」が3名（30%）という結果となり、満足度の高いセミナーとなったことがうかがえた。感想としては、「日本人教師の募集人数が年によって大きく異なることを知らなかったので、そのような情報の詳細を得ることができてよかった。また、今の日韓関係を受けての韓国の様子も聞くことができて非常に有意義だった」など、韓国で日本語を教えている現場の教師の生の話を聞いたことやレクチャーの後に、疑問点などを直接質問して、意見交換できたことを貴重な経験だと捉えたコメントが多く見られた。



図表3 韓国の日本語教育事情セミナーには満足しましたか(N=10)

## (3) 弘益大学校とのオンライン交流会に対する満足度

「5 非常に満足した」が6名（60%）、「4 満足した」が3名（30%）、「3 どちらとも言えない」が1名（10%）という結果となり、概ね満足度の高い交流会になったことがわかった。感想としては、「お互いに相手の言いたいことを理解しようという気持ちが働いていて、積極的にコミュニケーションが取れたのが良かった。間違えることを恐れなくて発言する韓国の大学生の様子を見て、外国語が上手くなるには発言しやすい雰囲気や本人の社交性も大事だと改めて思った」のように、日本語学習者の姿から学ぶことが多かったことを示すコメントが複数見られた。一方で、「もう少し時間があれば、もっと深い話のできたので、残念だった」のように、十分な時間を用意して大学生同士、ゆっくりと情報交換ができる会にすることを求めるコメントも複数あった。



図表4 弘益大学校とのオンライン交流会には満足しましたか(N=10)

#### (4) オンライン研修や交流会に対する参加の意欲

「今後もオンライン研修やオンライン交流会に参加してみたいですか」という質問項目に対しては、10名全員（100%）が「参加したい」と回答し、オンラインで実施する日本語教育の研修や交流会に対する意欲と積極的な姿勢がうかがえた。その理由としては、「オンラインでの交流はあまり経験がなかったが、今回使ってみてトラブルなどもなかった。この利便性を活かせば直接会うことが難しい人とも交流するチャンスがあると思った」「今回のどの交流でも自分の知らなかったことを現地の人から直接教えてもらったので、事実を生で知ることができていると感じられたから。もっと様々な人のお話や意見も聞いてみたいと思った」「家にいるので、比較的リラックスして話すことができたから」など、自宅にいながら遠隔的に同時・双方向につながり、物理的に直接会うことが難しい人とも交流ができ、学び合える利点を評価するコメントが目立った。

これらのアンケート結果から、学生のオンラインセミナーに対する満足度は高く、様々な内容を取り扱ったセミナーを企画することが期待されていることがわかった。

## 4. 日本語教師の先輩とつながるオンラインセミナー

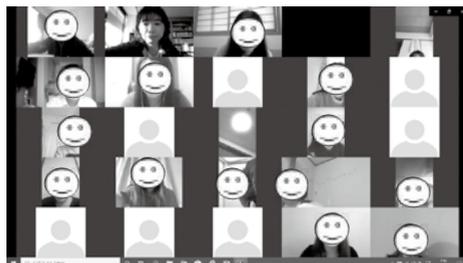
### 4.1 オンラインセミナーの概要

2019年12月14日、日本語教員養成課程の学生と海外の日本語教育現場で教えている（教えていた）卒業生とをつなぐオンラインセミナーを実施した。参加学生は2年生から4年生、大学院生の40名である。ゲストスピーカーである卒業生は、4名で、一人は韓国、一人はインドネシア、一人は東京、一人は仙台のそれぞれ自宅からミーティングルームに集まった。セミナーの時間は2時間で、前半1時間半は、ゲストスピーカーによるパワーポイントを使用

したプレゼンテーションを行った。内容は、大学時代の経験、日本語教師になったきっかけ、海外で教えることにした理由、海外での活動や、海外から帰国してからの活動の内容についてであった。後半30分は、zoomのブレイクアウトセッション機能を利用し、卒業生を囲んでの小グループでの質疑応答の時間を設けた。質疑応答の時間では、予定していた時間では、活発な意見交換がなされた。



図表5 オンラインセミナーのちらし



図表6 オンラインセミナー実施中のPC画面の例 (学生の顔は隠しています)

## 4.2 参加学生へのアンケート結果から

セミナー終了後、Googleフォームを利用してセミナーの感想を尋ねるアンケートを実施し、30名の参加者から回答があった<sup>3</sup>。ここではその回答の結果を報告する。

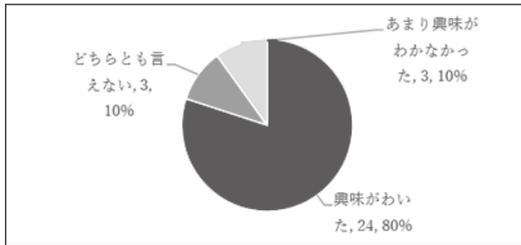
### (1) 先輩の話聞いて、海外の日本語教育現場に対する理解が深まったか

この質問項目に対しては、30名全員（100%）が「理解が深まった」と回答をした。このことにより、オンラインという手法を用いても、ゲストスピーカーの話聞き、その内容を理解することに関しては、概ね問題がないということがわかった。

<sup>3</sup> 回答者のうち2年生が17名（68%）、3年生が6名（24%）、4年生が2名（8%）であった。

## (2) 海外の日本語教育現場について、興味がわいたか

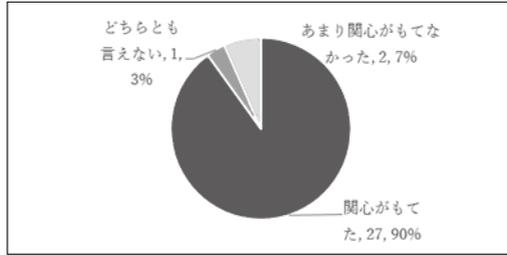
今回のセミナーのテーマである、海外の日本語教育については24名（80%）の学生が「興味がわいた」と回答し、3名（10%）が「どちらとも言えない」、3名（10%）が「あまり興味がわかかなかった」と回答した。全ての学生が海外志向であるというわけではないが、80%の学生が興味を持ったという点では、先輩の話を直接聞くことができたことの効果ではないかと推察する。



図表7 海外の日本語教育現場について、興味がわきましたか

## (3) 日本語教師というキャリアについて関心がもてたか

このセミナーは、海外の日本語教育現場を経験している先輩の話を聞き、海外での日本語教育経験を先輩一人ひとりがどのように捉え、今後どのように活かそうと考えているか、というキャリア形成について理解を深めるという目的をもつものであった。そのため、ゲストスピーカーは大学在学当時から、現在に至るまでのライフストーリーやその時々考えていたことなども詳しく話をしていた。このセミナーを通して日本語教師というキャリア形成について関心をもつことができたかどうか、という質問項目に対しては、27名（90%）の学生が「関心がもてた」と回答した。「どちらとも言えない」は1名（3.3%）、「あまり関心がもてなかった」は2名（6.7%）であり、多くの学生にとって関心をもてる内容になったことがうかがえた。



図表8 日本語教師というキャリア形成について関心がありましたか

#### (4) オンラインセミナーについての感想と今後のセミナーについての要望

アンケートでは最後に自由記述欄を設け、今回のオンラインセミナーについての感想と、今後の日本語教員養成課程におけるセミナーについての要望を尋ねた。ここに、参加学生の感想の例を挙げる。

##### 〈2年生の感想例〉

・海外で働くことを考えたことがなかったが、海外での日本語教育がより身近に感じられた。私は、一度就職したらそこに長く勤めるのが普通だと思っていたが、常に変化や成長を求め、行動を起こす先輩方の姿がかっこいいと感じた。

・実際に海外の現場で働いていらっしゃる先輩方のお話をお聞きして、とてもためになったし、すごく楽しそうだと思った。どの先輩もキラキラ笑顔で、様々な苦勞をしながらも毎日レベルアップに努めている姿はとても魅力的でぜひお会いしてお話したいと思った。

・話を聞いて、生き生きと話している先輩達を見て、イメージが湧き、質問したいことがたくさん浮かんだ。

##### 〈3年生の感想例〉

・複数の先輩からお話が聞けてとてもよかった。いろんな進路があることに気づく機会になった。個人的には二年生の時に経験したかったと思った。

・現在の職場の話だけではなく、どのようなキャリアを積んできたのかを聞くことができ、参考になった。日本語教師は大学院に行く必要があったり、新卒で常勤で採用されることが難しかったりなど、企業への就職という一般的な道とは違うので、その具体的な事例聞けるのはいい機会だった。

## 〈4年生の感想例〉

- ・今回は人数がとても多かったのですが、もし次回やるのであれば午前の部、午後の部と区切ると、それぞれの先輩方の話を詳しく聞けるといった。
- ・海外で実践経験を積んだ方や、現在海外にいる方とお話できたのは非常にいい経験だった。

多くの学生が感想欄に、実際に先輩の現場の話を聞いたことで具体的なイメージがわいたなど、今回のセミナーでの経験を肯定的に捉える内容を記載していた。特に2年生など、日本語教育の勉強が本格的に始まる時期に、このようなセミナーを通して日本語教育現場の具体的なイメージをもつような場を作ることが効果的であるということが見えてきた。今後のセミナーの要望としては、参加しやすい曜日・時間帯の工夫や、外国人の日本語学習者の話を聞くオンラインセミナーの実施を期待する声が上がった。

## 5. 日本語教員養成課程におけるオンラインセミナーの可能性

本稿では、2019年度に実施した日本語教員養成課程における海外の日本語教育とつながるオンラインセミナーの実践について報告した。参加した学生のアンケート結果からは、オンラインセミナーの内容と方法についての満足度は概ね高く、今後も多様なテーマにおけるオンラインセミナーの実施に対する期待度が高いことが明らかとなった。特に、今回は物理的、時間的、経済的に簡単に訪れることが難しい海外の日本語教育現場や、海外にいる日本語学習者、日本語教師とのつながり形成を目的としていたため、オンラインという手法は効果的であったと思われる。

2020年現在、新型コロナウイルスの影響で、日本を含め世界中の教育現場で遠隔授業が実施されることになり、インターネットを介したオンライン学習／教育のニーズが急激に高まっている。対面授業を前提としていたこれまでの教育現場では、その授業内容と方法の変更が迫られ、オンライン授業に不慣れであったりインターネット通信環境が万全に整っていなかったりする学生への対応にも苦慮している。インフラの面においては、一教師や一授業の裁量や工夫で解決できない問題も多く、教育機関や国の支援も必要不可欠であろう。しかし、そうしたインフラの問題が解決した状況においては、物理的、時間的、経済的な壁を越えてつながり、オンラインで双方向に学び合え

る学習システムの構築は積極的に考えていくべきだと考える。これからの時代を生きる日本語教師には、ICTを活用した日本語授業デザインができる力が不可欠であるからである。日本語教育という専門領域に関していえば、今まさに世界中で実施されているオンライン日本語学習／教育の具体的な内容と方法に直接触れられる貴重な機会にもなっていることを、逆境を逆手にとる発想で活かしていきたい。具体的には、海外の日本語学習者、教師との同時・双方向的な交流学習の実施を積極的に実施し、通常の授業では実施が難しかった、海外の日本語教育現場の授業見学／参加の機会をオンラインの場で作り、より多くの多様な日本語学習者や教師とつながり、学び合う機会を創出したいと考えている。

#### 【参考文献】

- 国際交流基金（2019）「2018年度海外日本語教育機関調査（速報値）」  
<https://www.jpf.go.jp/j/about/press/2019/dl/2019-029-02.pdf>（最終アクセス：2020年5月5日）
- 後藤康志・松井賢二（2016）「Web会議システムによる遠隔教員研修の試行」『新潟大学高等教育研究』4, 47-51,
- 澤邊裕子・中川正臣・岩井朝乃・相澤由佳（2018）「教室と社会をつなげる交流学習実践コミュニティは何を目指すのか——外国語教育における〈拡張型交流学習〉の可能性」『日本語教育研究』第44輯、pp.115-133.